

ドブロブニク国際梵文叙事詩
プラーナ会議 (DICSEP)

原 實

1997年8月11日より16日までアドリア海に臨むクロアチア共和国の景勝の地、Dubrovnik の Inter-University Centre に於いて第一回国際梵文叙事詩プラーナ学会が開催され、筆者はこの夏三菱財団の資助によりこれに参加する機会を得た。これより先 1994年、Zagreb 大学教授 Mislav Ježić は在欧の学者に諮って準備委員会を持ち、一昨年夏にその第一回学会を催す手筈を整えていたが、当時戦雲なお収まらぬまま直前になって中止を余儀なくされ、今年にまで持ち越された。

周知の通りクロアチアは1991年6月、旧ユーゴスラヴィアよりの独立の際、セルビア人の激しい攻撃を受けて1992年に到った。今も尚部分的に残る戦禍の痕はそれを如実に物語っているが、都市中心部はほぼ完全に修復され、治安は回復されている。国民の間に危機感なお去りやらぬものあり、民族間の和解には尚いくばくかの歳月を要すると思われるが、知識人の中には自国を護って独立を勝ち得た誇りを感じる事が出来る。

今回の学会参加国は豪 (G.Bailey)、英 (J.and M.Brockington、R.Söhnen-Thieme)、米 (A.Hiltebeitel)、独 (H.Brinkhaus)、加 (F.Brassard)、露 (Y.Vassilkov)、スイス (P.Schreiner、D.F.Jatavallabhula、J.Sudhakar)、ノルウエー (G.von Simson)、フィンランド (P.Koskikallio)、ポーランド (I.Milewska)、日本 (M.Hara) と、それに主催国のクロアチア (M.Ježić、K.Gonc-Moacanin、M.Jauk-Pinhak) を加えて計12カ国、発表者は18名を数え、それに数人の Zagreb 大学大学院学生が参加していた。Tübingen の H.von Stietenron が岳父の計により急遽参加を取り消した以外は、予め予定していた Member の全員が参加した。

会議は8月10日午前9時より始まり、発表者各自の持ち時間は質疑応答の時間を含めて60分、8月15日の祭日を除いて毎日午前中に3人乃至4人が発表して午後1時に至り、昼食を共にしてから再び午後5時に集合して7時まで5つの主題を巡って Workshop が開催された。プログラムは「叙事詩の伝承、口伝性」「時間の概念」「叙事詩研究と近代機器」等、発表論文の内容

と性格に従って特定題目のもとに編成され、会議の運営は周到を極めていた。発表論文の内容も極めて高度で、準備と人選に当をえていた事は特筆に値する。それは1996年1月バリで催された Louis Renou 生誕百年記念国際研究集会のそれを思わすものがあり、全集会を通じて毎日全員参加して一人の欠席者なく、討論も極めて活発ながら会議は終始和気藹々の内に進められた。その成功は一に主催者 M.Ježić 博士の力量と努力によると思われるが、以下に先ずプログラムの全容を提示する。

Monday, 11 August

Text hermeneutics and inter-textuality

- 1 .M.Hara, The concept of ātman in the Bhagavadgītā.
- 2 .F.Brassard, The concept of buddhi in the Bhagavadgītā
- 3 .G.Bailey, Intertextuality in the Purāṇas : a neglected element in the study of Sanskrit literature.

Orality

- 4 .J.Brockington, Formulae in the Rāmāyaṇa: an index of orality?

Workshop

Issue involved in the shift from oral to written transmission of Rāmāyaṇa and Mahābhārata (J.Brockington and Y.Vassilkov.)

Tuesday, 12 August

Literary genres and techniques of composition.

- 1 .R.Söhnen-Thieme, On the composition of the Dyūtaparvan in the Mahābhārata
- 2 .M.Brockington, The art of backwards composition : some narrative techniques in Vālmiki's Rāmāyaṇa.
- 3 .K.Gonc-Moacanin, Nāṭya versus Epic literature : some question about relationships between classical Indian theatre, Mahābhārata, Rāmāyaṇa, Harivaṃśa and some Purāṇas.
- 4 .J.Sudhakar, Epics and Indian Poetics.

Workshop

The process of growth of the Rāmāyaṇa : why? and why not? (M. Brockington)

Wednesday 13 August

Relationship of Vedic, Epic and Purāṇic texts.

- 1 .D.-E.Jatavallabhula, The theft of the Soma : a comparison between Vedic and epic data.
- 2 .M.Ježić, The relationship between the Bhagavadgītā and the Vedic

Upaniṣads : correspondences with early Greek philosophy.

3 .A.Hiltebeitel, Rethinking “Bhṛguization.”

4 .P.Koshikallio, The horse sacrifice in the Pāṭālakhaṇḍa of the Pa-
dmapurāṇa.

Workshop

The Bhagavadgītā and the Vedic Upaniṣads (M.Ježić)

Thursday 14 August

Purāṇas and modern times.

1 .P.Schreiner, The Bhāgavatapurāṇa as a model for the Satsaṅgi-
jīvanam

2 .M.Jauk-Pinhak, Epic and purāṇic lore in the Systema Brahmani-
cum of Paulinus A Sancto Bartholomaeo.

3 .I.Milewska, Indian and European modern film versions of the
Mahābhārata : similarities and differences.

Workshop

Future research on the Sanskrit Epics and Purāṇas (G.Bailey)

Saturday 16 August

Concepts of time

1 .H.Brinkhaus, Cyclical determinism and the development of the
trimūrti-doctrine.

2 .G.von Simson, Narrative time and its relation to the supposed
year myth in the Mahābhārata.

3 .Y.Vassilkov, Kālavāda (the doctrine of time) in the Mahā-bhā-
rata and the concept of “heroic didactics.”

Workshop

Texts and machines...and people, an exchange of experiences and
expectations concerning the feasibility of co-operation. (P.
Schreiner)

このプログラムによっても明らかなように、全18篇の中、Mahābhārata
に関するもの8、Rāmāyaṇa 2、Purāṇa 3、それら全体にわたるもの5を
数えているが、今ここに発表論文の総てにわたる事は不可能であるので、以
下に Mahābhārata に関連する三篇の新研究の概略のみ紹介し、最後にそ
の中の一人で今回初めて知己を得たロシア人学者の論文一篇に言及する。

1 . A.Hiltebeitel, Rethinking “Bhṛguization.”

所謂 Bhārata (24.000頌) から現在の Mahā-bhārata (100.000頌) に至

東
洋
学
報

第
七
十
九
卷

二
八
六

る間に Niti と Dharma に長けた特異なバラモン Bhṛgu 系諸仙が介在して、彼等が原初の叙事詩を現在のそれに改作して行ったであろうとなす仮説は、既に1936年 V.S.Sukthankar が提唱した所であった。彼は MBh. 全体を巻を追って Bhārgava 物語を辿り、それを組織的に論じたが、後年 R.Goldman は更にそれを主題別に検討した(1977)。著者は今回、先ずこの MBh. の所謂 Bhṛguization の研究史を批判的に概観し、Bhārgava-s を通時的よりも寧ろ共時的に捉らうべき視点を提唱した。周知の通り Bhārgava バラモンは Asura 的な暴力と激烈さを特徴とした武人的バラモンであり、それは就中 Bhārgava Rāma によって代表されるが、著者は Śaunaka を初めとする彼等 Bhārgava-s を MBh. の中の実際の登場人物となし、彼等が叙事詩の中で一般のバラモンの為は何を訴えようとしたかを問う。即ち彼等が敢えて自分達に不都合な非バラモンの、Asura 的要素を叙事詩に導入した動機は何処に在ったか著者は改めて問題にした。そして武力の行使を本務 (svadharma) とする武人に、果てしなき血の復讐から一族を救済する、暴力鎮静の道 (sānti) を見出す術を彼等が模索していたのではないかと著者は推測した。

2. R.Söhnen Thieme, On the composition of the Dyūta-parvan.

MBh. の第二巻 Sabhā-parvan は叙事詩全体の展開に中心的意味を持ち、就中その最後から二番目に位する Dyūta-parvan には叙事詩の主要人物が悉く登場して場面は Pāṇḍava 五王子の悲劇へと展開して行く。この巻の研究者に過去 J.A.B.van Buitenen と M.C.Smith を数え、後者はこの巻の重要な部分に用いられている韻律が極めて古い irregular Vedic triṣṭubh である事から、この部分が叙事詩の古層に属する事を推論し、又前者はこの巻を古代祭祀の文脈と比較してそこに an epic dramatization of the events of the rājasūya を見出した。今回著者はこの部分に見える韻律を更に精査して、その Vedic triṣṭubh, anuṣṭubh, upajāti で歌われている部分を比較検討して夫々の特徴を明らかにした。その結果 upajāti を暫く措き、triṣṭubh が対話乃至討論に、anuṣṭubh が主として物語進行の叙述と、triṣṭubh 部分によって既に明らかになっているものの再説に用いられて事実を明らかにした。そしてこの物語作者の意図はあくまで運命 (daiva, diṣṭa) による悲劇を予告するに在り、そこにさいころ遊びと祭祀を結び付ける必要はないとして van Buitenen の説を斥けている。

3. Y.V.Vassilkov, Kālavāda texts in the Mahābhārata

梵語で「時間」を意味する kāla はしばしば「運命」の義に用いられ、それは古くからこの世の一切を支配する最高原理の一つに高められた。著者はその系譜を辿りつつ、叙事詩に見える Kālavāda, kālavādin の問題を一括

して論じた。

以上が今回出席した国際集会の概要であるが、最後に言及したロシアの叙事詩学者を通して筆者は今回ロシアにおけるインド学の現状を知る機会を得た。同氏は叙事詩の他、Milinda-paṇha（ミリンダ王の問い）に関しても興味深い研究を発表しているので、この機会にその概要を紹介したいと考える。その論文は同氏の数少ない英文論稿⁽¹⁾の一つで、今は廃刊となった The Petersburg Journal of Cultural Studies vol.I, 1993 pp.64-77に掲載され、“Did East and West really meet in Milinda’s Questions?” の標題を有している。

周知の通りこの書はギリシャ人の王とインドの仏教哲学者が対話討論し、その結果王が哲人によって教化される経緯を伝えているが、本邦にあっては夙に学者の注目する所となって一度ならず邦訳され、就中漢訳那先比丘経との比較研究は原典成立史に貢献するところがあった。併しこの書は古代における東西思想交流の典型とされ、本邦にあってはかく仏教の西洋思想への優位の面が喧伝される嫌いがあるが、西欧にあっては以前から別種の偏見を以って見られがちであった。本論文はこの西欧の偏見を正す事を目的として書かれ、Milinda-paṇha に見られる「対話」が純粹にインドの「討論」「論争」(vāda) の伝統の上に在り、それに根差している事実を文献の証拠によって立証した。更にこれまで不可解とされていた dhamma-karaka (法瓶) (PTS. p.68) に新解釈を提唱する傍ら、本書に見える東西交流が思想史としてよりも、寧ろ文物のそれであった可能性のある事を示唆している。

Milinda-paṇha の中にギリシャ、より詳しくはプラトン（ソクラテス）の対話篇のインド的反映のある事を最初に指摘したのは A.Weber であった。このギリシャ起源説を更に発展させて、本書の背後に今は失われたギリシャ語原典が存在したであろうと推定したのは有名なヘレニズム研究者 W.W. Tarn である。近時物故したオランダの碩学 J.Gonda はこの Tarn の説を斥けたが、ギリシャ起源説はなお現在でも有力に残存し、西欧で無批判に行われている嫌いがある。Vasillkov の所論はこの西欧に今なお残る偏見、「ギリシャ起源説」を最終的に斥けるものである。

インドにおける討論 (verbal contest) の由緒は古く、それは夙にヴェーダの Brahmodaya に淵源し、ブラーフマナ、ウパニシャドを経由して叙事詩 (MBh. 3 .132-134) に至るが、討論は原則として集会 (pariṣad, sabhā) に於いてなされ、参加者はしばしばその勝敗に生死を賭けた。この点は近年 F.B.J.Kuiper, J.C.Heesterman の解明した所である。

Milinda-paṇha に在って初日に王は車を駆って、集会 (parisad) に彼を

待つ哲人 Nāgasena の許に赴き、討論に彼と対峙する。彼は自ら質問者となるが、討論に敗れて馬上の人となって帰館する。この事実は往路に彼が使用した車駕が討論の勝者に帰属した事を暗示しているが、この習俗は討論のみならず一騎打ち場合も同様で、それは古いインドの伝統 (SB.11.6.2, 報 MBh. 2.22, 3.97) に根差していた。

論争の技術に長けた哲人 Nāgasena の自信とは裏腹に、討論に先立って原 王を襲った危惧、恐怖の類 (sabhā-bhaya) も古代インドの討論に特徴的である (MBh.12.219.18)。討論の成敗が「生と死」「天国と地獄」に連関する、極めて緊張した言葉の営み (vāg-yuddha MBh.12.192.45) であった故である。

もと祭祀の一環であったこのインドの討論は後により体系化されて Nyāya-sūtra 第五章に論争法の術語となって固定し、他面形式化されてチベット仏教の rtsod-pa にも継承されるが、この Milinda-pañha に見える討論の公開性 (sabhā, pariṣad) と、それが生死を賭ける真剣な営みであった事実は古代インドに特徴的で、それは「ソクラテスの対話」に見られるような古代ギリシャの対話形式と凡そその趣きを異にしている。何故ならソクラテスはしばしば町角、個人の家、牢獄その他で討論なし、そこには sabhā の如き公開の設定はなく、Milinda 王の抱いた恐怖に象徴される様な真剣勝負の雰囲気もなかった。従って Milinda-pañha の対論は飽くまで純インド的の土壤の上に成立したものと言うべく、そこに「ギリシャ起源説」介入の余地はない。

しからば、Milinda-pañha に於いて古代インドとギリシャ文化の接触は皆無であったであろうか。周知の通り、M. Winternitz はこの種の議論における否定論の急先鋒で、小数の固有名詞 (Milinda = Menander, Devamantiya = Demetrius, Anantakāya = Antiochus) を除いてそれ以外には本書にギリシャ的要素なしと断じたが、Milinda-pañha の著者が古典地中海文明の文物に通暁していた証拠の一例として、ここに dhamma-karaka が提示される。

通常「法瓶」と翻訳されるこの合成語はギリシャ人の発案した水時計 (clepsydra) を指示している。それは上と下に小さな穴のついた円筒乃至方形の容器で、人がその上の穴を指で塞いで水に浸け、水をその中に満たして取り出し、その指を外す時、それは下方の穴から水をゆっくり少しずつ落し始める。dhamma- とあるのはそれがしばしば法廷における陳述時間制限に用いられていた故事に由来する。Nāgasena がこれを例証として取り上げた事実の背景には、この時代に地中海世界に広く知れていた文物 (Empedokles にも他の文脈で現れるという) が既に西北インドにまで知れて

いた事実を物語っている。

ところで Milinda-pañha に特徴的な事は、日常的な卓近な例を用いて自説を論証し、相手を説得する点にある。もとより「喩」は五分作法の一環として哲学文献に現れるが、論式に見られる比喩は比較的限られ、且つ定形化している場合が多い。これに反して本書に見える比喩は都市文明の産物である日用品から多く採られている。dhamma-karaka はまさしくその一例であるが、本書に見える比喩を逐一検討する事はその意味で東西文化の交流の研究に資する所があるであろう。

このように見てくる時、Milinda-pañha に見えるギリシャの影響、東西文化の接触の痕跡はその哲学的概念というより、寧ろその背景をなしていた文化文物一般に求められるべきかも知れない。

閉会に先立って8月13日夜役委員会が開かれ、その結論を持って最終日に今後の方針が決定された。

1. 今回の国際集會に発表された論文は総てこれを印刷して公刊する。
2. 本国際集會は三年に一度今回と同じ Duvrobnik の地に於いて開催され、開催地はこの地に恒久化する。但し次回に限り1999年を予定する。
3. この集會を永続的なものにするため、出版活動を今回の Proceedings に限定せず、学術的定期刊行物 (Journal) に定着させる。そのため近い将来編集委員会を発足させる方針である。

註

- (1) Yaroslav V. Vassilkovの英文論文には他に次のものがある。
 - “The Mahābhārata’s Typological Definition Reconsidered,” (Indo-iranian Journal 38, pp.249-256, 1995)
 - “Draupadi in the Assembly-Hall, Gandharva-Husbands and the origin of the Gaṇikās,” (Indologica Taurinensia 15-16, 1989-1990, pp.388-398 1987)
 - “Parable of a man hanging in a tree, and its archaic background,” *СТХА/ЛКАШ/РАДДА*, pp.257-269.